私を綴る

釧路市立美原中学校　佐々木碧　２年

　音楽には、命を綴る力がある。閉じ込められた私を音楽は救ってくれた。
　小さい頃の記憶はもう残っていないが、物心が付いた時には、誰かの顔色をうかがって生活していた。褒められると嬉しくて、怒られると悲しかったから。私が少しがまんして言われた通りにすれば、大人はみんな褒めてくれた。幼い時はそれで良かった。けれど、人は成長してしまう。年齢に比例して、求められる物も大きくなった。それでも私は私でいなければならなかった。誰かの期待に応えることでしか、自分の存在意義を感じられなかったから。次第に、理想と現実にはギャップがうまれた。ふくれ上がる矛盾と重なる嘘が本当の私を押し殺していく。
　そんな時、私はソングライティングに出会った。ピアノを習っている私にとって、それは最高の趣味になった。誰に聴かせるでもないけれど、押し殺したと思っていた本当の私が言葉と旋律が産む物語となって昇華していった。おかげで私の日常は色を取り戻した。何気ない日々の欠片は、私だけの音となり、それらの紡ぐ歌は私だけの世界になった。誰も知らない私だけの世界。そこでなら私は、本当の私でいられる。私は私をほんの少しだけ好きになれる。
　それから数年がたった今も、曲を作り続けている。いつかそれを仕事にできれば良いなという夢を思い描くようにもなった。きっと世の中のほとんどの人は、どこか自分を偽っているのではないだろうか。他人と足並みをそろえることは確かに大切だ。人は一人では生きていけないのだから。しかし、時にそれが足枷になってしまうこともある。だから私はその足枷を取り払ってあげられる人になりたい。私の綴った言葉で、旋律で、誰かがほんの少し前を向けるような、そんな音楽を作りたい。何者でもなかった私に色を与えてくれた音楽で、今度は私が誰かの日常に彩りを与えられるように。
　私は音楽が大好きだ。本当の自分をさらけ出すことのできる唯一の場所だから。ここでなら私は私を愛することができるから。いまだに誰かの顔色をうかがってしまう自分自身を受け入れることができるから。この命が消えるまで私は音楽を止められない。だから私は、音と言葉で私を綴る。